

Title	運動部の運営方法の捉え方と顧問教師の経歴の関係
Sub Title	A study on the relations between the management style of athletic club and the careers of instructors
Author	佐藤, 正伸(Sato, Masanobu)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1998
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.37, No.1 (1998. 1) ,p.1- 9
JaLC DOI	
Abstract	It is expected that the fundamental principles of athletic club management is common to all instructors. But, each instructor who is carrying an actual instructing load has its own the fundamental principles of athletic club management. Why do they grasp it different? The purpose of this study is to clarify the cause of the different grasping. The findings of this study will contribute to the upbringing program of sport instructor. I thought that the following careers ; the sport performance, the number of years for athlete, the academic background and the attendance of instructor's seminar, have influenced the grasping of the management style of athletic club. Therefore, I investigated the instructors who manage the athletic club of the track and field in senior high school by the questionnaires. As a result, it was clarified that the management style of athletic club was different from the various of the number of years for athlete or the attendance of instructor's seminar. Therefore, it is thought that these careers have been influenced to the grasping of the management style of athletic club. I must to clarify the details of above-mentioned careers in the near future. And, the desirable management style of athletic club has to examine, too. The suggestion for the upbringing program of sport instructor will be more practically by these discussions.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00370001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

運動部の運営方法の捉え方と顧問教師の経歴の関係

佐 藤 正 伸*

A Study on the Relations Between the Management Style of Athletic Club and the Careers of Instructors

Masanobu Sato¹

Abstract

It is expected that the fundamental principles of athletic club management is common to all instructors. But, each instructor who is carrying an actual instructing load has its own the fundamental principles of athletic club management. Why do they grasp it different? The purpose of this study is to clarify the cause of the different grasping. The findings of this study will contribute to the upbringing program of sport instructor.

I thought that the following careers ; the sport performance, the number of years for athlete, the academic background and the attendance of instructor's seminar, have influenced the grasping of the management style of athletic club. Therefore, I investigated the instructors who manage the athletic club of the track and field in senior high school by the questionnaires.

As a result, it was clarified that the management style of athletic club was different from the various of the number of years for athlete or the attendance of instructor's seminar. Therefore, it is thought that these careers have been influenced to the grasping of the management style of athletic club.

I must to clarify the details of above-mentioned careers in the near future. And, the desirable management style of athletic club has to examine, too. The suggestion for the upbringing program of sport instructor will be more practically by these discussions.

Key Words ; management style of athletic club, careers of instructor, upbringing program of sport instructor

1. 目 的

学校におけるスポーツ活動は、教科である体育科の授業と教科外の活動とに分類され、さらに後者は、特別活動とそれ以外とに分けられる¹⁹⁾。運動部活動には、スポーツ活動によって生徒に身体的な発達を促すのみならず、集団活動を介して社会性や人間性などを培うこともでき、広範な教育効果が期待される^{9) 19)}。つまり、学校教育活動において、正課である体育科の授業に匹敵する役割を担っているのである。もっとも、学校教育の目的や方法を定めた学習指導要領の中で、運動部活動は教科外かつ特別活動以外の活動に属す活動である。また、教科や特別活動については目的や実施の仕方などが細かく示されているが、運動部活動については、特に示されていない。

このように、運動部活動とは、さまざまな教育効果が期待されながらも、学校教育活動の制度としては重みが与えられていない、非常に曖昧な存在であり、必然的に、その指導者である顧問教師の育成方法も不明瞭な部分が多い。各教科の教員には、関連法規に定められた育成課程があり、体育科の場合、体育学部あるいは教育学部体育学科などにおいて、そ

*慶應義塾大学体育研究所助手

¹Assistant of the Institute of Physical Education, Keio University.

れが行われている。しかし運動部活動の顧問教師に関しては、必要単位などは特に定められていない。僅かに、教育原理などの単位の中で、特別活動に関する内容が含まれているだけである。つまり、運動部活動は、育成方法が曖昧なままに委任された顧問教師によって運営されているのである。もちろん、この現状は問題とされるべきであり、顧問教師の育成方法は早急に確立されなければならないと考えられる。

ところで、スポーツ指導の様式は各指導者によって独特であるが、その基本的見解については、一定の共通理解が期待される。このことを探った報告はないが、指導者の中に共通理解が持たれていないことを推察させる報告はある¹²⁾。顧問教師の運動部の運営方法に関しては、上述した報告の調査対象者が運動部の顧問教師であることを踏まえると、同様に共通理解が持たれていないことが予想される。もっとも、逆説的であるが、顧問教師によって運営方法の捉え方が異なる原因が明らかになれば、運動部の運営方法を修得した過程を推察することができる。もちろん、このような知見は顧問教師の育成方法を確立する、重要な手掛かりとなる。そこで、顧問教師によって運動部の運営方法の捉え方が異なる要因を明らかにすることを目的とし、本研究を行った。

もちろん、顧問教師の育成方法を確立していくには、期待される顧問教師の姿を明確にする必要がある。しかし、それは学校教育活動としての運動部活動の目的、他の学校教育活動との関わりや独自性など、広範な論議を経なければならない、容易には為せない重要な検討課題である。したがって、今回は明言を避ける、顧問教師によって運営方法の捉え方が異なる原因から、それを修得した過程を推察するに留まる。この上に、今後の検討によって期待される運動部活動の顧問教師の姿を明らかにし、2つの討論の延長上に顧問教師の育成方法を論じていきたいと考えている。

2. 方 法

2.1. 調査対象

運動部の運営方法が、指導対象者の学齢やスポーツ種目によって違うことは当然であり、本研究が着眼する「運営方法の捉え方の違い」と同義に扱う必要はない。したがって調査にあたっては、指導対象者の学齢やスポーツ種目を限定しておく必要があり、今回は高等学校における陸上競技部の運営方法を調査対象とした。ところで、昨今の運動部活動が抱える問題の1つに、「生徒の運動部離れ」がある。運動部という名目的な組織はあるが実質的な活動をしている部員がいない、というような状況である。このような状況を克服することも、顧問教師に期待される運動部の運営方法であるが、今回の研究の主題からは逸れ、本研究の対象としては不適切と考えられる。そこで「実質的な活動」を行っているか否か、という基準を「全国高等学校ランキング100傑以内に入選者を輩出している」というレベルとし、該当校の顧問教師を調査対象とすることにした。1994年の結果¹⁰⁾を基にしたところ、全国高等学校体育連盟の陸上競技部に登録している約5000校中1194校が該当した。このうち500校を無作為に抽出して、郵送によってアンケートを実施したところ、325人（回収率は65%）から回答が得られた。

2.2. 調査項目の設定

2.2.1. 「運動部の運営方法」について

森川⁹⁾は、運動部の運営方法を「学校組織における運動部活動のあり方」と「スポーツ指導の方法」という2視点から論じている。前項においては、運動部活動が学校教育の一環であることを踏まえ、運動部活動の目的、組織づくりの方法、教育行政との関わり、などについて解説している。また、後項においては、トレーニング諸科学の理論について解説している。一方、運動部の顧問教師という立場ではないが、競技スポーツチームの運営者であるコーチの職務に関する見解は多々ある。例えば村木¹¹⁾は「コーチには、トレーナー、戦術・戦略指揮、管理、経営、人事、経理、教師、安全管理、リクルーター、営業、広報、資金調達、旅行エージェント、などの機能・役割が必要」としている。あるい

は北森⁹⁾は「コーチの職務遂行には計画・組織化・指令・統制・調整の5つの機能がある」としている。運動部活動の顧問教師もコーチの一側面を有しており、いずれも応用が可能な見解である。これらのように、必要要件を抽出して列記した報告に対し、Mac Lean⁷⁾は、スポーツ指導者の職務内容を整理・分類した。それによると、スポーツ指導は「スポーツ指導」「スポーツ指導を支える活動」「チームの組織化」「外部組織との連携」、という4要素に要約される。「スポーツ指導」とは当にそのものであるが、「スポーツ指導を支える活動」とは安全管理や情報収集など、「チームの組織化」とは活動計画の立案やチームの雰囲気への配慮など、「外部組織との連携」とは関連競技団体や父母との連携などである。この報告は、そのデータ数や分析方法から、妥当性の高いものと考えられる。また、先述の森川⁸⁾、村木¹⁰⁾、北森⁹⁾の各見解も、この範疇にある。

そこで、この4要素を基に、本研究が着眼した「運動部の運営方法」に関連する実践報告など^{1) 5) 6) 8) 9) 13) 15) 16) 17) 20)}を参考に、調査対象である「高等学校の陸上競技部」という特性を考慮して、各要素ごとに5項目の合計20項目を設定した。また、アンケート調査上では、各職務に対する重視の程度を質問し、回答は「非常に重視している」「重視している」「ふつう」「重視していない」「全く重視していない」の5段階尺度から求めた。

2.2.2. 「捉え方が異なる原因」について

一般に「態度」とは、その概念規定に緒論あるものの、ほぼ「特定の事象に対する個人の思考様式」と考えられている。したがって、本研究の主題である「運動部の運営方法の捉え方」もまた、「態度」の1つと考えられる。さて、原岡³⁾、辻¹⁸⁾、岡部¹⁹⁾らは、さまざまな状況下における態度変容について検討を積んでいる。各々の場面によって関わり方は異なるが、「態度の対象に関連する諸経験」が主要な原因であることは、いずれの報告にも共通する。

もちろん、「運動部の運営方法の捉え方の違い」にも適応が可能であり、「関連する諸経験」が原因と考えられるが、あまりにも曖昧である。ところで、本研究は顧問教師の育成方法を確立すること究極的な目的としている。したがって、操作が可能な要因との関わりを明らかにすることによって、それが可能となろう。そこで今回は、「部員（競技者）として指導を受けた経験」と「顧問教師（指導者）として育成を受けた経験」とに着目し、かつ、前者は「競技者時代の競技成績」「競技経験年数」、後者は「出身学部」「指導者講習会への参加経験」、の4項目について検討した。

2.3. 分析の手順

まず、前項で示した4項目は次のような下位次元に分類した。すなわち、「競技者時代の競技成績」は「地域規模大会レベル以下」と「全国規模大会レベル以上」、「競技経験年数」は「10年以下」と「11年以上」、「出身学部」は「体育関連」と「体育以外」、「指導者講習会への参加」は「ある」「ない」、のそれぞれ2群である。なお、「部員（競技者）として指導を受けた経験」に関連し、陸上競技の経験のない顧問教師については、今回は分析対象から除外した。

さて、運営方法の捉え方が異なる要因として設定した各項目が妥当ならば、各々の下位次元の異なりによって、重視度に明確な差異があると考えられる。今回の場合は、いずれも下位次元が2つなので、t検定（Student's t検定）を用いて、重視の程度の差異を検証した。なお、5段階尺度の回答に対しては、各々5点から1点の得点化を行った。また、分析にあたっては、パーソナル・コンピュータ用の統計分析ソフト「SPSS for WIN」を使用した。

3. 結果と考察

3.1. 顧問教師の経歴

表1に「顧問教師の経歴」として、回答者の個人属性を示した（割合は有効回答に対するものであり、有効回答数は項目によって異なる）。なお調査項目には、回答者集団の概要を把握するため、「捉え方が異なる原因」として設定した経歴以外の項目も含まれている。

運動部の運営方法の捉え方と顧問教師の経歴の関係

特徴としては、まず、全体の93.8%が男性であり、是非は別として、女性指導者の割合が少ないことが指摘される。また、年齢については40歳台の割合が多く、平均が41.8歳、陸上競技部の顧問としての経験年数については11～20年の割合が多く、平均が17.5年であった。今回調査対象とした「全国高等学校ランキング100傑以内に入選者を輩出する」というレベルの運動部は、実質的な活動をしていると同時に高度なレベルでもある。これらの結果から、そのようなレベルの運動部を組織するには一定年数が必要と推察される。ところで、競技成績については、全国大会規模の競技会への出場経験が60.1%、国際規模大会への出場経験が10.1%であった。70%以上の者が、一般的に「一流」と考えられる競技成績を修めている。これは興味深い傾向である。

表1 顧問教師の経歴

項目	区分	実数	割合
性別	男性	304	93.8
	女性	20	6.2
年齢	20歳台	29	9.0
	30歳台	98	30.5
	40歳台	132	41.0
	50歳台	61	18.9
	60歳台	2	0.6
	※平均=41.8歳		
指導経験	10年以下	83	25.9
	11～20年	121	37.7
	21～30年	86	26.8
	31年以上	31	9.1
	※平均=17.5年		
競技経験	10年以下	156	52.2
	11年以上	143	48.8
競技成績	都道府県規模競技会	27	9.1
	地域規模競技会	62	20.9
	全国規模競技会	179	60.1
	国際規模競技会	30	10.1
出身学部	体育関係	260	81.0
	体育以外	61	19.0
講習会参加	あり	263	86.2
	なし	42	13.8

注意) 割合は有効回答に対するもの。

また、有効回答数は項目によって異なる。

3.2. 運動部の運営方法と顧問教師の経歴

先述した「分析の手順」に則って、運動部の運営方法と顧問教師の経歴の関係を検討していく。まず、「部員（競技者）として指導を受けた経験」についてである。なお、陸上競技の経験のない顧問教師については、今回は分析対象から除外した。

表2に、「競技者時代の競技成績」の違いによる、運営方法の異なりに関する結果を示した。その結果、「身体による競技指導」「卒業後の進路指導」「予算や決算といった金銭的な管理」の3項目の運営方法に対する重視度が、「競技者時代の競技成績」の違いによって有意に異なった。また、いずれの場合も「全国規模競技会以上」群が高い値を示していた。したがって、これらの運営項目と指導者の競技成績には関連があり、かつ、高い競技成績を修めている指導者ほど重視している、と考えられる。しかし、関連が窺える場面が20項目中3項目のみということは、2要因の関連は薄いと推察される。

一方、表3に、「競技経験年数」の違いによる、運営方法の異なりに関する結果を示した。その結果、「競技者の身体状況への配慮」「身体による競技指導」「練習環境の整備や安全管理」「競技者の生活・素行の指導」「卒業後の進路指導」「予算や決算といった金銭的な管理」「競技者の課程の理解や協力を得る」「学校近隣の理解や協力を得る」の8項目の運営方法に対する重視度が、「競技経験年数」の違いによって有意に異なった。また、いずれの項目も「11年以上」群が高い値を示していた。したがって、これらの運営項目と指導者の競技経験年数には関連があり、かつ、競技経験年数の長い指導者ほど重視していると考えられる。また、20項目中8項目について関連が窺えるということは、2要因の関連は密と推察される。

このように、「競技経験年数」の影響が大きいと考えられたが、経験年数の背景にある、競技活動を通してのさまざまな学習経験の影響が窺える。つまり、競技者としての学習経験は、同時に将来の指導者としての学習経験でもあると言える。したがって、競技界の発展を期待するならば、そのことを意図した競技者指導を展開することの必要性が示唆される。

表2 競技者時代の競技成績の違いによる運営方法の捉え方の異なり

運動部の運営方法	競技者時代の競技成績		t 値
	地域大会以上	全国大会以上	
<u>スポーツ指導</u>			
トレーニング計画の立案や修正	4.24	4.37	-1.35
言語による競技指導	4.33	4.25	0.87
競技者の精神状況への配慮	4.16	4.12	0.46
競技者の身体状況への配慮	4.07	4.05	0.25
身体による競技指導	3.71	3.92	-2.01 *
<u>スポーツ指導を支える活動</u>			
練習環境の整備や安全管理	4.44	4.47	-0.28
競技者の生活・素行の指導	4.19	4.30	-1.02
卒業後の進路指導	4.03	4.32	-2.37 **
指導上必要な諸情報の収集	4.29	4.38	-0.97
新入生の勧誘	3.70	3.72	-0.11
<u>チームの組織化</u>			
チーム内の雰囲気への配慮	4.34	4.36	-0.16
競技者間の交友関係の把握	3.97	3.90	0.67
年間計画の作成	4.01	4.17	-1.58
活動のために必要な費用の金策	3.33	3.56	-1.74
予算や決算といった金銭的な管理	3.25	3.49	-2.11 *
<u>外部組織との連携</u>			
競技者の家庭の理解や協力を得る	4.15	4.18	-0.23
同僚の理解や協力を得る	3.85	3.99	-1.21
競技連盟との連携	3.65	3.67	-0.23
学校近隣の理解や協力を得る	3.50	3.52	-0.13
スポーツ用品メーカーなどへの協力依頼	2.86	3.08	-1.49

注意) * $p \leq 0.05$ ** $p \leq 0.01$ *** $p \leq 0.001$

表3 競技経験年数の違いによる運営方法の捉え方の異なり

運動部の運営方法	競技経験年数		t 値
	10年以下	11年以上	
<u>スポーツ指導</u>			
トレーニング計画の立案や修正	4.25	4.41	-1.85
言語による競技指導	4.21	4.33	-1.30
競技者の精神状況への配慮	4.05	4.20	-1.68
競技者の身体状況への配慮	3.95	4.14	-2.10 *
身体による競技指導	3.71	4.00	-2.99 **
<u>スポーツ指導を支える活動</u>			
練習環境の整備や安全管理	4.35	4.56	-2.73 **
競技者の生活・素行の指導	4.17	4.36	-1.96 *
卒業後の進路指導	4.10	4.35	-2.54 **
指導上必要な諸情報の収集	4.05	4.16	-1.23
新入生の勧誘	3.62	3.81	-1.54
<u>チームの組織化</u>			
チーム内の雰囲気への配慮	4.32	4.39	-0.80
競技者間の交友関係の把握	3.91	3.91	0.05
年間計画の作成	4.05	4.20	-1.52
活動のために必要な費用の金策	3.37	3.59	-1.90
予算や決算といった金銭的な管理	3.31	3.53	-2.09 *
<u>外部組織との連携</u>			
競技者の家庭の理解や協力を得る	4.01	4.32	-3.09 **
同僚の理解や協力を得る	3.87	4.01	-1.28
競技連盟との連携	3.60	3.73	-1.24
学校近隣の理解や協力を得る	3.39	3.62	-2.00 *
スポーツ用品メーカーなどへの協力依頼	2.94	3.08	-1.11

注意) * $p \leq 0.05$ ** $p \leq 0.01$ *** $p \leq 0.001$

次に、「顧問教師（指導者）として育成を受けた経験」についてである。表4に、「出身学部」の違いによる、運営方法の異なりに関する結果を示した。その結果、「言語による競技指導」「練習環境の整備や安全管理」「卒業後の進路指導」「年間の活動計画の立案」の4項目の運営方法に対する重視度が、「出身学部」の違いによって有意に異なった。特に、また、いずれの項目も「体育関連」群が高い値を示している。したがって、これらの運営項目と指導者の出身学部には関連があり、かつ、体育関連の学部学科を卒業した指導者ほど重視している、と考えられる。しかし、先の「競技成績」と同様に、関連が窺える場面が20項目中4項目ということは、2要因の関連は薄いと推察される。

一方、表5に、「指導者講習会への参加経験」の違いによる、運営方法の異なりに関する結果を示した。その結果、「トレーニング計画の立案や修正」「言語による競技指導」「競技者の精神状況への配慮」「競技者の身体状況への配慮」「練習環境の整備や安全管理」「卒業後の進路指導」「指導上必要な諸情報の収集」「チーム内の雰囲気への配慮」「年間計画の作成」の9項目の運営方法の重視度が、「指導者講習会への参加経験」の違いによって、有意に異なった。また、いずれの項目も「あり」群が高い値を示していた。したがって、これらの運営項目と指導者の指導者講習会への参加経験には関連があり、かつ、参加経験のある指導者ほど重視していると考えられる。また、先の「指導経験年数」と同様に、20項目中9項目について関連が窺えるということは、2要因の関わりは濃いと推察される。

このように「指導者講習会への参加経験」の影響が大きいということは、自ずと、その実施の仕方や内容などに一層な検討を積み重ねられる必要性が示唆される。また、現在実施されている指導者講習会のほとんどは、競技スポーツの指導者、すなわちコーチとしての資質を高めることを意図したものである。運動部活動の顧問教師としての講習会は稀であり、今後このような制度を整備していくことの必要性が示唆される。

表4 出身学部の違いによる運営方法の捉え方の異なり

運動部の運営方法	出身学部		t 値
	体育関連	体育以外	
<u>スポーツ指導</u>			
トレーニング計画の立案や修正	4.33	4.14	1.69
言語による競技指導	4.30	4.03	2.53 **
競技者の精神状況への配慮	4.13	4.03	0.96
競技者の身体状況への配慮	4.04	3.96	0.68
身体による競技指導	3.82	3.83	-0.08
<u>スポーツ指導を支える活動</u>			
練習環境の整備や安全管理	4.49	4.19	3.14 **
競技者の生活・素行の指導	3.90	4.00	-0.81
卒業後の進路指導	4.25	3.91	2.85 **
指導上必要な諸情報の収集	4.36	4.13	2.21 *
新入生の勧誘	3.71	3.50	1.36
<u>チームの組織化</u>			
チーム内の雰囲気への配慮	4.36	4.40	-0.44
競技者間の交友関係の把握	4.28	4.09	1.48
年間計画の作成	4.15	3.78	3.05 **
活動のために必要な費用の金策	3.48	3.27	1.38
予算や決算といった金銭的な管理	3.44	3.21	1.72
<u>外部組織との連携</u>			
競技者の家庭の理解や協力を得る	4.18	4.04	1.04
同僚の理解や協力を得る	3.92	3.91	0.06
競技連盟との連携	3.64	3.60	0.32
学校近隣の理解や協力を得る	3.50	3.40	0.67
スポーツ用品メーカーなどへの協力依頼	3.04	2.81	1.38

注意) * $p \leq 0.05$ ** $p \leq 0.01$ *** $p \leq 0.001$

表5 指導者講習会への参加経験の違いによる運営方法の捉え方の異なり

運動部の運営方法	指導者講習会への参加経験		t 値
	あ り	な し	
スポーツ指導			
トレーニング計画の立案や修正	4.36	3.90	3.58 ***
言語による競技指導	4.30	3.95	2.79 *
競技者の精神状況への配慮	4.14	3.87	2.17
競技者の身体状況への配慮	4.06	3.80	1.19
身体による競技指導	3.86	3.63	1.60 *
スポーツ指導を支える活動			
練習環境の整備や安全管理	4.46	4.24	1.97 *
競技者の生活・素行の指導	4.27	4.04	1.59 ***
卒業後の進路指導	4.21	3.97	1.91
指導上必要な諸情報の収集	4.13	3.63	3.81
新入生の勧誘	3.70	3.46	1.36 *
チームの組織化			
チーム内の雰囲気への配慮	3.49	3.17	1.94 ***
競技者間の交友関係の把握	3.90	3.92	-0.14
年間計画の作成	3.63	3.14	3.65
活動のために必要な費用の金策	3.46	3.24	1.28
予算や決算といった金銭的な管理	3.41	3.29	0.76
外部組織との連携			
競技者の家庭の理解や協力を得る	4.17	4.02	0.99
同僚の理解や協力を得る	3.91	3.95	-0.22
競技連盟との連携	3.65	3.51	0.92
学校近隣の理解や協力を得る	3.51	3.31	1.20
スポーツ用品メーカーなどへの協力依頼	3.00	3.02	-0.11

注意) * $p \leq 0.05$ ** $p \leq 0.01$ *** $p \leq 0.001$

4. ま と め

さまざまな教育効果が期待される運動部活動であるが、その運営方法の捉え方は顧問教師によって異なっている。もちろん、問題とされるべき現状であるが、本研究は、この現状を逆説的に視た。すなわち、顧問教師によって運動部の運営方法の捉え方が異なる要因を明らかにすることによって、顧問教師が運動部の運営方法を修得した過程が推察できると考えた。もちろん、このような知見は顧問教師の育成方法を論じる礎となる言える。

そこで、高等学校の陸上競技部の顧問教師を対象とするアンケート調査によって、運営方法の捉え方が異なる原因を検討した。顧問教師の「競技者時代の競技成績」「競技経験年数」「出身学部」「指導者講習会への参加経験」の4つの経験が、その原因と仮定し、統計分析によって検討した。その結果、「競技経験年数」と「指導者講習会への参加経験」の影響が大きいことが明らかになった。

もっとも、「競技経験年数」と「指導者講習会への参加経験」の影響が大きいことが明らかになったとは言え、その詳細は不明である。例えば、競技経験の年月の中で、どのような出来事が運営方法の捉え方に影響を及ぼしたのであろうか。あるいは、指導者講習会は、さまざまな団体がそれぞれの内容を提供しているが、特に啓蒙を受けたであろう講習内容は、何だったのであろうか。このような詳細を明らかにする必要があるだろう。

ところで、今回は、期待される顧問教師の姿、すなわち運動部の期待される運営方法は触れなかった。先述したが、学校教育活動としての運動部活動の目的、他の学校教育活動との関連などといった広範な論議から、それは早急に検討する

必要がある。本研究が最終的な目的とする「顧問教師の育成方法の確立」は、今回の知見とその討論の結果の延長上にある。

《参考文献》

- 1) 阿部征次 (1995) コーチングあらかると, ベースボール・マガジン社, Pp.223.
- 2) Chelladurai, P. (1980) Dimension of leader behavior in sport, *Journal of Sport Psychology*, 1, pp.34-45.
- 3) 原岡一馬 (1971) 態度変容の社会心理学, 金子書房, pp.1-12.
- 4) 北森義明 (1991) 監督に必要なマネジメント能力とは, *トレーニング・ジャーナル*, 13(2), pp.12-14.
- 5) 久保正秋 (1994) 「コーチング」概念の分析-「コーチング (アドミニストレーション)」の概念の検討-, *スポーツ教育学研究*, 14 (2), pp.67-76.
- 6) Leith Larry (1989) *Coaches Guide to Sport Administration*, Leisure Press, pp.7-18.
- 7) Mac Lean J.& Cheradurai P. (1995) Dimensions of coaching performance, *Journal of Sport Management*, 9, pp.194-207.
- 8) Martens Rainer (1990) *Successful Coaching*, Leisure Press, pp.57-88.
- 9) 森川貞夫 (1989) 部活動ハンドブック, 大修館, Pp.287.
- 10) 野口純正・田辺清一・佐藤正伸 (1995) 陸上競技マガジン別冊・1994年記録集計号, ベースボール・マガジン社, pp.101-156.
- 11) 村本征人 (1989) コーチとは? トレーナーとは?, *コーチング・クリニック*, 3(4), pp.62-63.
- 12) 日本陸上競技連盟指導カリキュラム開発プロジェクト研究班 (1990) 陸上競技のコーチングに関する調査研究, 日本陸上競技連盟, Pp.49.
- 13) 日本スポーツ方法学会コーチ学研究委員会 (1994) コーチ学入門, 日本スポーツ方法学会, pp13-50.
- 14) 岡部慶三・竹内郁郎・鮑戸 弘 (1972) 社会心理学, 新曜社, pp.41-80.
- 15) Rupert,T. (1989) Teaching and coaching;A comparison of instruction behavior. *Journal of Teaching in Physical Education*. 9(1),pp.49-57.
- 16) Siegel,D. (1992) Setting the standards for coaching curriculums,*Journal of Physical Education, Recreation and Dance*,36(1),pp.60-64.
- 17) 武田 建 (1985) コーチング—人を育てる心理学—, 誠信書房, Pp.253.
- 18) 辻 正三 (1987) 個人と社会の心理学, 協同出版, pp.8-52.
- 19) 宇土正彦 (1988) 学校体育経営ハンドブック, 大修館書店, p.207.
- 20) White,H.(1987)Adminstrative characteristics of HPERD adminstrators. *Journal of Physical Education, Recreation and Dance*, 58(9),pp.18-21.